会 議 結 果 報 告 書

件　　名　　平成２８年度コミュニティ会議と市との協議の場
日　　時　　平成２９年３月２８日（火）　午前１０時～１１時３０分
会　　場　　花巻市生涯学園都市会館　３階　第２・３中ホール

Ⅰ　目　的

コミュニティ会議と花巻市が共通理解を深めながら、協働によるまちづくりを一層推進するため、協議の場を設け意見交換を行うことにより、地域の発展に資することを目的とする。

Ⅱ　出席者　　（別添ファイル　03 出席者名簿を参照）

コミュニティ会議代表者　　２６名
花巻市コミュニティアドバイザー　　１名
花巻市　　１７名　　計４４名

Ⅲ　次　第

１　開　会
２　挨　拶
３　報　告　　『地域づくりの仕組みの振り返りについて』

(1)　４地区の活動報告　　（別添ファイル　04 資料、05 資料を参照）

花巻地域　　宮野目コミュニティ会議
大迫地域　　外川目地区コミュニティ会議
石鳥谷地域　　好地地区まちづくり委員会
東和地域　　成島地区コミュニティ会議

(2)　活動のまとめ〔花巻市コミュニティアドバイザー　役重眞喜子氏〕　　（別添ファイル　06 資料を参照）

「花巻市地域づくり　10 年目のステップアップへ向けて」

○課題

今回の見直しの背景には、①やらされ感・負担感が強い②住民参加・参画が進んでこない③行政のサポート、連携不足といった大きく３つの課題があった。

これに加えて、ここ数年の自治体消滅・人口減少といった喫緊の課題にも取り組んでいけるもう一歩上のステップアップした積極的な地域づくりを行っていかないと地域は生き残れないという危機感がある。そこに向けて対応できているかということが一つの大きな課題として足りない部分ではないかということで、見直しを進めているところである。

見直しといっても、いろいろな手法を変えていくというわけではなく、時間をかけて、今までの取り組んできたことに更に力をつけ、支援していくにはどうしたらよいかということでの見直しである。

○ワークショップについて

今回のワークショップでは、これまでの 10 年間の成果を振り返り、これからの目標を語り合ってもらい、その中から課題やどのような改善が必要であるかを行政が掴みたいという目的をもってワークショップを行っている。

ワークの結果から３点のことについて気付いた。

(<u>対話の手法の有効性と限界</u>)

一つは、対話の手法自体がとても有効なものであったと改めて気付くことができたということが大きな成果であった。ただし、ワークショップの手法にも限界があるので、ワークショップに出てきたことが言いっ放しではなく、次にどう繋げていくのか次のステップを考えて行っていかなければならない。

(「人」「意欲」を拾えていない)

もう一つは、ワークショップに多くの方に参加してもらい、地域を愛する気持ち、もっとこうしたいという意欲もある。そういう若い人、女性もいる。そういったモチベーションが今まで埋もれていたのかもしれないということに気付いた。気付いたということは、それは今までうまく拾えていなかったというところに課題があったということ。４地区全部で出たことだが、役員は地域の役のついた方々なので、非常に過重な負担になっている。そういった忙しい方々の集まりであるので、限界があるというのが浮かび上がった。

(地域性の違い)

地域の置かれた状況がやはり４地区やっただけでも、かなりいろんな違う状況があったことから、きめ細かな支援というのがやはり不可欠だということ。

○「人」「意欲」どう拾うか（住民総意と住民創意）

地域づくりには二つの考え方がある。　一つは、住民総意。みんなが合意してやるべきこと、たとえば、公共インフラ、福祉、防災などの地域づくり。もう一つは、住民創意。みんなが合意するまで一歩も前に進めないということでは、地域づくりというのは絶対進まないので、意欲ある人をどんどん応援して、進めていこうじゃないかというもの。

この二つが絶対必要になるが、住民総意というのは、その地域で合意形成するというのがなかなか難しい。これは、本来は行政の役割。一方で、地域にしかできない事というのが創意。地域は、創意の方を頑張ってもらいたい。

やはり地域にしか言えないことをやってほしいし、やることが望ましいが、実際には交付金ということで、行政の役割が移ってきているという状況が現実にある。そのことによって、ある程度どちらにも目をくばらなければならない難しい立場になってしまっている。結局、コミュニティの計画というのはどうしても総合計画地域版になってきてしまっているし、最大公約数的な事業しかできなくなってしまっていて、なかなか新しいことにチャレンジできない、だから若い人もなかなか入ってこない。これは、コミュニティが悪いのではなくて、こういうしくみをとっている以上、宿命的についてまわる課題である。

○豊田市の地域自治システムの例

愛知県豊田市地域自治システムは、二つの考え方二つの事業から成り立っている。

(地域予算提案制度)

一つは、住民総意の地域予算提案制度。これは、住民の総意が必要なインフラや防災、福祉に関わるもので、区長会、町内会連合会そういう全世帯加入の組織を活かして、行政が一自治区あたり２０００万円の一般会計の中で地域の提案に従って執行するというかたちのしくみ。

(わくわく事業)

もう一つは、創る方の創意でわくわく事業。これは、意欲のある住民グループを支援する、まさにとにかく先に立って頑張って引っ張っている人を応援しようとするしくみ。住民自ら実施するという事で一自治区あたり定額の５００万円。

合併前の旧町単位、旧市部は学区単位にある地域会議では、提案された中身を審査して５００万円を配分するという機能を持っている。

豊田市足助町という合併前のまちづくりで有名なところのわくわく事業の発表の場に行って来た。地区を守るという事でいろんなイベントや住民活動が展開されていて、郷土芸能の活動やいろんなチャレンジの発表を行っていた。地域会議の人達は、このイベント全体の運営をすべて手作りでやっていて、わくわく事業の人達の前で地域会議が頑張っているところが見えるようなしくみであった。

地域会議の役員、メンバーには、女性の方々もいるが、もともとはわくわく事業でいろいろ手を挙げて子育て支援とかいろんな活動をしてきた方で、わくわく事業に手を挙げたことによって、結果的に地域会議に関わっている。これは非常に大事な事だと思う。こういう実際に汗をかいて活動する中から若い人の参画も進んできている。ワークショップや人材育成塾をやったから参加してくるかといったらそうではない。ひとつのこういうしくみが大事だと思う。ここ１０年で人口８，０００人位の小さな地域でこういう活動の芽が無数に花開いている。

○地域に置かれた状況

地域づくりに向かって進むには、一番大事なボトムには危機感というものがないといけない。このままじゃだめだ、このままでは消滅するかもしれないといった危機感がすべてのスタートである。危機感が少ない地域は、地域づくりに結びつかない。

次に、危機感はあるが自助の意識というのが比較的無い。地域をなんとかしなければいけないと思うが行政頼みという考え。

次に、危機感もあり自助の意識もあるが、地域が一つにまとまっていかない。リーダーシップとは限らないが地域がまとまりにくいということ。いろんなアイデアを持っている人はいるが、動きがまとまっていかないという地域。

最後に、危機感も自助意識もありリーダーシップもあるが、手法がわからない。地域づくりでは、人口減少、高齢化、いろんな難しい問題に対処していけないというところで、立ち止まってしまっているという地域もある。ここまできている地域では、ＮＰＯとかいろいろな人が来てノウハウを一生懸命移植することが有効になるが、このあたりまできていないところではノウハウだけ持ってきても失敗に終わるという場合が多い。

○きめ細やかな支援

地域の状況を見極めながらきめ細やかな支援が必要である。ワークショップは、危機感、自助の意識、ここの気づきが大事だということで、非常に有効。私たちの地域にはこういう課題があるよね、こうしないともっと大変なことになるよね、あるいは行政頼みじゃなく、自分たちの出来る事こんなにあるよね、それに気づく事である。

それよりもっと先に動ける地域もある。そういう場合は、たとえばリーダーシップというものでは地域づくりの組織、エリアの考え方がある。今の単位がいいのか旧町単位がいいのかということもある。リーダーシップを発揮しやすい、まとまりやすい組織やエリアを考えていく必要がある。花巻市の２７の組織は、合併後に大急ぎで立ち上げて作った組織。１０年経って馴染んではきているが、改めて原点に返るのも大事かなと思う。

ノウハウについては、本当は行政が得意な部分、行政にしか出来ない部分である。例えばいろいろなＮＰＯや外の研究者など内外のネットワークをどんどん必要な地域にマッチングさせてあげる。これによって地域は活性化する。ここがまだまだ足りない部分。

○来年度へ向けて

（人づくり）

人づくりということで、ワークショップと人材育成。これは地道な作業だがやっていきたい。ワークショップをやっていればいいかということではなくて、根本的に意欲ある人をどうやって拾うか、交付金利用のわくわく事業のようなものや組織づくりも含めて考えていくことが必要。

（縁づくり）

二つ目に縁づくりということで、ノウハウの部分。意識もまとまりも十分、これからもどんどんやっていきたいという地域にどれだけネットワークの支援できるかということ。

（場づくり）

最後に場づくり。これが一番大事だと思う。しくみづくり、交付金見直しとかいうのは、大変な作業なので、時間をかけてコミュニティだけでなくいろんな団体、関係者、専門家も含めてオープンな議論を設けていく、その中で例えばモデル的にこういう地区でこういうことやっていこうとか、そういう話も中で揉んでいくのかなと思っている。

○おわりに

今のままでの安定という事ではなくて、やはり人口減少とか地域は何ができるのかということをさらに積極的にチャレンジして、そういうコミュニティのあり方というものを目指していってもらいたい。

(3) 花巻市の今後の取り組みについて　　（別添ファイル　07 資料を参照）

① ワークショップ及び意見交換会の開催

② ファシリテーター養成講座の開催

③ 地域づくり講演会の開催等

⑷ 意見交換

笹間

ワークショップの参加者はどのようなメンバーだったのか。特に石鳥谷地区の参加者について伺いたい。来年度のＷＳは、今年度同様モデル地区として実施するのか、希望地区はすべて実施してもらえるのか伺いたい。

石鳥谷地域支援室

好地地区のＷＳ参加者は、１１行政区から各２名ずつ、男女で５０歳程度の方に参加していただいた。そのほかにＰＴＡ、商店街、山車づくりの代表、婦人の代表の方などの各種団体の方にご参加いただいた。

好地地区まちづくり委員会

各区の理事に広く声をかけていただいて、幅広い方に参加していただいた。人集めが大変だが、みなさん頑張っていただきたい。

東和地域支援室

成島地区は、コミュニティ会議の役員、部会長が参加した。自治会の女性部長、民生児童委員、子供会の会長、消防団の方に参加していただいた。

大迫地域支援室

外川目地区は、９つの自治公民館に３名ずつの参加依頼をして、２０人規模で行った。若い方ということでお願いをしたが、３名の参加が難しい地区もあった。

地域づくり課

来年度以降のＷＳは、別紙「平成２９年度の地域づくりの仕組みの振り返りについての意向調査」にて意向の報告をお願いしたい。あまり時間をかけずに２～３年の間で残る２３地区の振り返りを実施したい。

八日市　（意見）

地域のＷＳを開催しても、地域内での生活や考え方が中心になるので限界があるように思う。地域づくりの先進地との交流を行っているが、先進事例もなかなか見つけにくい。

花巻市内でもいろいろな事例があり、役員との意見交換も参考になると思うので、地域で求めているところとのマッチングを地域支援監に調整していただき、内部での縁づくりも進めていただきたい。

⑸ 講 評　〔市長〕

ワークショップは、危機感と自助意識をしっかり見つめなおす手法として、ぜひ進めていきたい。市の職員も人数に限りがあるということで、１０人位の職員を派遣しながらやるといった場合に、２３地区について２９年度中に実施することは難しいが、次の手を考えるためにも早くやらなければならないとなった時に、解消する努力をしなければならない。花巻の中でもＮＰＯ法人でやりたいという方達もいる。他の市でもやっている方もいる。お金はかかることだが、考えてほしいと思う。

それから、ワークショップについては、限界があると、あくまで危機感とか自助意識の点についての気づきの問題であるという指摘があった。また、市がやるべきことと、コミュニティ会議がやるべきこと、これをもう少し考えた方がいいという話があった。

豊田市足助町の例として、住民総意で地域予算提案制度、地域の方々が何に使うかということを決めたうえで、執行については行政がやるという話があった。執行まで皆さんがすることで負担感は相当大きくなっていくことを考えると、予算を使うということについてはコミュニティ会議が考えつつ、例えばハード事業については執行の部分は行政がするというしくみを考えてもいいのではないか。

若い方々の参加、ワークショップで参加しているが、実際にコミュニティ会議の活動に入らないということであれば、わくわく事業のように自分たちがやりたいことについて、コミュニティ会議の支援をいただきながらやっていく中で、コミュニティ会議の組織にも入ってくということも、非常に有効な手法なのではないか。

コミュニティ会議のあり方について、市の職員が机の上で考えるのだけではなく、あくまで皆さまの意見を聞いてその上でやっていかなければならない。やり方について、やはり市の職員がもう少し考えて皆さんとざっくばらんに話をして、お互いにコミュニティ会議のあり方について、アイデアを考える事をやってもいいのではないか。

モデル地区ということで、一つのコミュニティ会議あるいはコミュニティ会議がいくらか集まって共通で一部をやっていくということを含めて、モデル的にやってもいいというところがあれば、それは取り組んでもいいのではないかと感じた。例えば、総合支所の単位で自分たちのところはこういう事をやりたいという事を提

案いただければ、市も考えることはできるし、また、それについて、その提案をコミュニティ会議の地区の中で話し合って、いい方向にやっていくという事も必要なのかなということを感じた。

危機感とか自助の意識についての気づきの部分でワークショップが必要だということはそのとおりであるが、リーダーシップとかノウハウなどの部分については、もう少し市の方でいろんな意見を皆さんと話しあっていくのも必要なのかなということを感じた。ぜひ、役重さん、広田教授、若菜さん、ＮＰＯの人達と集まっていろんな意見をぶつけて、次のステップへ向けてさらに良くなるように、皆さんと一緒に考えていきたい。

４　閉　会